平成19年度畜産大賞　経営部門最優秀賞受賞事例の概要

最優秀賞選賞事例の名称・代表者名
「人・牛・大地の融合－ロマン実らせた放牧酪農－」
小栗　隆・小栗　美笑子

小栗牧場は北海道南部の八雲町に立地し現在は畜産、施設野菜等の生産が盛んな地域である。八雲町は北海道酪農の発祥地といわれ、現在も道南の酪農の中心地として1万頭の乳牛で4.5万ｔの生乳生産が行われている。

小栗氏は昭和48年に帯広畜産大学卒業後就農し、54年に父親から経営移譲を受けた後、種馬鈴薯、小麦等の畑作物を整理し、60年に酪農専業に転換した。当時の北海道酪農は濃厚飼料多給型の高泌乳生産が一般的で、小栗氏も高泌乳生産を経営目標にしたが、牛の疾病の多発や購入飼料費の増加のため、コスト高で高乳量にもかかわらず所得の伸び悩みや不安定さに加え、まるで「介護酪農」のような飼養管理に気苦労が絶えなかった。

こうした中で家族の「何故、放牧をしないのか」という発言に触発され、道内の放牧酪農の先進地視察、中でも浜中町の事例にふれ、平成9年放牧酪農への転換を決意し、本格的に放牧酪農へ転換した。放牧酪農への転換後には、経産牛1頭当たり乳量は9,000kg台から7,000kg台に減少したが、購入飼料費（3分の1）や診療衛生費（7分の1）等の大幅な生産費用の減少に伴って、生産コストの減少から舎飼い時代の「高コスト・低所得」から「低コスト・高所得」経営に脱皮した。

現状の経営は経営主夫婦と長男の3人の労力で草地50haを基盤に経産牛45頭、育成牛20頭前後で年間所得1,370万円を安定確保している。

今日の「低コスト・高所得」経営を実現した技術的・経営的な評価点は、①固定的大放牧区による夏期間の昼夜放牧、②土壌診断に基づく草地の肥培等管理、③ふん尿処理と経営内循環利用、④飼料生産の単純化による省力生産と高品質サイレージの調製、⑤粗飼料の完全自給による購入飼料費の大幅削減、⑥プレミアム牛乳生産による高乳価の実現、⑦労力的なゆとりの確保と「低コスト・高所得」経営の達成、⑧放牧による省力化とゆとりある経営の実現とチーズの加工・販売、⑨地域の酪農リーダーとしての活躍、⑩次世代への経営継承－等があげられる。

なお、小栗牧場の主要な経営成果を示すと以下のとおりである。

酪農部門所得	13,706千円
家族労働力1人当たり所得	5,483千円
経産牛1頭当たり所得	305千円
所得率	47.0%
乳飼比	13.5%